

## グローバリゼーションの中の人文学 魅惑する時間と偽りの約束

下河辺美知子

はじめに：人文学からしかアクセスできない現実があること

「グローバル」「グローバリズム」そして「グローバリゼーション」。こうしたカタカナ表記で通用するほどに、これらの言葉は日本社会でその言語的地位を獲得している。海外の諸国－少なくとも英語が文化の深層に入り込んでいる諸文化圏－においても、これらの言葉の記号的指示力は確立していると言えよう。「グローブ (globe = 球体)」という語から派生したこうした用語は、「グローブ (globe = 地球)」の上で暮らす人間たちの日常行動を支配している。グローバリゼーションという運動は、今や、資本主義の経済活動を刺激し、国家という名の共同体の政治的思惑をかきたてながら我々の心に日々、活動のエネルギーを供給している。インターネットが普及した現在、地球の表面でうごめく人間たちのグローバルな活動は世界中に同時中継されている。

一つの言葉が使われるとき、その言葉を使う人間は、その言葉と自分との間にどのような絆を作っているのだろうかと考えることがある。「グローバリズムを標榜する企業」、「グローバリゼーションへの対応を掲げる教育制度」、「グローバルな自分／グローバルになろうとする自分」といった形でこの言葉が使われるとき、そこにあるのは未来を見据える希望なのか、それとも、現在を変えなくてはという焦燥なのか。地球規模にことを起こし、地球を一つのシステム内に統合するべく稼働するこの巨大エンジンに対して、我々は政治的・経済的・倫理的にどのような関係を取りむすぶべきなのか。グローバリゼーションの進行に対する心の準備をするために、グローバリゼーションの実体を確認しておくことが今、必要とされている。

\*

ガヤトリ・チャクラヴォルティ・スピヴァクは、『サバルタンは語る事が出来るのか』(1988 邦訳1998) や『ある学問の死』(2003 邦訳2004) といった著作を通して自らの声を我々に届け続けているが、今や人文学に携わる者が常に耳を傾けるべき批評家の一人となっている。<sup>1</sup> そのスピヴァクが

新著『グローバリゼーションの時代における美的教育』(*An Aesthetic Education in the Era of Globalization*, Harvard U.P. 2012) を出版した。600 頁にもおよぶ大部な本の中に収められたのは、1987 年から 2009 年までに彼女が書いた 25 本の論文である。とりわけ注目したいのは、それらエッセイの前におかれた「序文」である。この本に収録された論文より後に書かれていることから、スピヴァクは「この序文をあとがき (a postface) と見なしてほしい」(26) と言っている。

34 頁にわたる長大な「序文」のなかで、スピヴァクは、20 年以上にわたって書いてきたものを振り返り、研究者、教育者、そして批評家としての自らの位置を確かめる作業を行っている。自分の研究・教育の経歴を、スピヴァクは「カント-マルクス-シラー-ド・マン」という智の巨人たちの軌跡をたどりながらたどっていく。<sup>2</sup> 長きにわたりインドとアメリカの両方で教育にたずさわり、世界のさまざまな場所へ赴いて多様な言語による多様な状況報告に接してきた彼女が自分の仕事を総括するとき、そこには人文学 (the humanities) という領域が広がっている。スピヴァクの声に耳をかたむけながら、我々は人文学からしかアクセスできぬ現実があることを確認し、人文学によってしか見据えることのできぬグローバリゼーションの正体があることを再発見してゆきたい。

## 1. グローバリゼーションの中に立つ実感

グローバリゼーションは自分にとって良きものであるのかそうでないのか。21 世紀の今、このことを問うことさえせずに、我々はグローバリゼーションの中に取り込まれている。いやむしろ、グローバリゼーションのうねりに自ら進んで時間と資産と知的能力とを投げ込んで、人々は、あたかも強迫観念に突き動かされたようにうねりの最先端へ向かって泳ぎだしている。スピヴァクはそうした事態を見据えて以下のような洞察を示している。

The most pernicious presupposition today is that globalization has *happily* happened in every aspect of our lives. (2 italic mine)<sup>3</sup>

ここでは二つのことが言われている。一つは、グローバリゼーションが「我々の生活のあらゆる局面ですでに起こっており」そのことが「うまく実

現されている (happily)」<sup>4</sup> こと。今一つは、そうした事態を「予測すること (presupposition) が (スピヴァクから見れば) 致命的な事態 (pernicious) となっている」こと。注目したいのは、グローバリゼーションを語るこの短い一文の中に二つの時制—現在完了形 (has happened) と未来形 (pre-)—が同居していることだ。ここに、グローバリゼーションの心理的側面についてのスピヴァクのするどい洞察が込められている。人は、事がすでに起こっているとき、自分が立ち遅れていると考えることはしない。むしろ、それを歓迎するという心理的操作を行うことでこれからの時間を先取りし、グローバリゼーションを主導する側に身を置こうとする。場合によっては自分がそれを先導しているのだと信じようとさえするかもしれない。

一体、グローバリゼーションが「うまく実現している (happily happened)」と言うが、それは誰にとって「うまく」なのであろうか。グローバリゼーションは人々を二つに分けていく巨大なマシンだ。そのマシンに乗る側とマシンに押しつぶされる側の二つであれば、人は必ず自分を前者であると思ひこもうとするだろう。現在完了形によってもたらされる自分の現状に少しの不安があったとしても、グローバリゼーションという概念は、未来への予測を担保に現在を売るための促進剤となって、すべての人々を happy にすることが可能である。「今、我々の世界は希望 (またはその欠如) とセンチメンタルなナショナリズム (またはセンチメンタルなポストナショナリズム的グローバリズム) という場に成立している」(1) というスピヴァクの言葉は、不安と焦燥の中にいる我々の前で、我々を誘惑するグローバリズムの「希望」の概念が点滅している様子を説明しているのである。

われわれはどちらの側にいるのか? グローバリズムという空間の魅惑は、そのシステムを自分の利益のために稼働させる立場に“いつかは”自分も立てるのではないかという可能性を手放さずに時間を引き延ばしていられることかもしれない。未来の可能性については誰にでも夢想する権利がある。自由・平等を建国の礎としたアメリカ合衆国がグローバリゼーションという運動の発信元となっていることも、こうしてみると自然の帰結なのである。

しかし、グローバリゼーション＝アメリカという図式が成立するもう一つの理由がある。それは、アメリカという空間が資本主義で覆いつくされているという事情である。スピヴァクは『ある学問の死』(2003年)でグローバリゼーションを次のように説明していた。

Globalization is the imposition of the same system of exchange everywhere.  
(*Discipline* 72)

「世界中に一つのシステムをあてはめること」とだけ聞けば、そこでグローバリゼーションの暴力はまだ明らかになってはいない。しかし、そのシステムが「為替」という資本主義の基本的活動にかかわるものであるとき、そのシステムの独占・強制は、資本主義を自らの利益の増大のために利用できる側と、それによって自らの心身を吸い取られる側とに人々を振り分ける暴力となっていく。

『ある学問の死』を出した2003年の時点で、スピヴァクは後者の人々について具体的に述べることはしていない。それに対して2012年出版の『グローバリゼーションの時代における美的教育』には、資本主義の恩恵から隔絶された地域の人々についての論文をいくつも収録している。<sup>5</sup>また、同時期に来日したスピヴァクの講演の中では、「国家を使えない」サルタン階級（『声』65）が具体例をあげて言及されているのを見ることができる。金融資本という「世界規模の支配力」（『声』77）に押しつぶされる側に立って発言するスピヴァクからの問いかけは、グローバリゼーションの中にいる我々一人ひとりに自らの立ち位置を今一度点検してみることを要請するのである。

## 2. グローバリゼーションの時間感覚

「序文」の冒頭でスピヴァクはグローバリゼーションの正体について以下のように宣言する。

Globalization takes place only in capital and data. … Information command has ruined knowing and reading. (1)

「資本とデータの中で」グローバリゼーションは起こっているというのが、我々の実感としてとらえるときそれはどのようなことなのか。一方、資本とデータの中「でのみ (only)」グローバリゼーションが起こるという限定がついているが、それでは、グローバリゼーションが起こりえない領域があるというのか。そうだとすれば、それはどこなのか。こうしたことを考えるために、グローバリゼーションの中の時間感覚を今一度問い直してみたい。

先に述べたように、スピヴァクの言うグローバリゼーションとは、一つの交換システムを、地球を覆いつくす形で立ち上げようとするものである。交換システムとは、経済活動の基本である。労働と賃金を交換して我々は給料を得ている。商品と金銭を交換して我々は物を購入する。異なる国の通貨を為替レートというシステムの中で入れ替えることで国際的な金融活動は行われている。こうして見てみると、21 世紀世界において〈資本〉という金融媒体が〈データ〉の中で交換されることがグローバリゼーションであるという話に納得させられる。

スピヴァクは 2012 年 11 月 14 日、大阪大学でのフォーラムで以下のように語っている。

グローバリゼーションは、可能なかぎり厳密にいうとするなら、シリコンチップによって引き起こされる電子化のおかげで可能となる、一日二十四時間、週あたり七日間、常時とどまることなく続く、資本とデータの電子的な運動です。(『声』 87 強調下河辺)

グローバリゼーションが「資本とデータ」で起きているということは、グローバリゼーションが、コンピューター画面にドットの集積として表示される数字がおりなす「電子的な運動」であるということである。それは、五感によって承認できる交換とはかけ離れたものであり、あるものが別のものに置き換わるその妥当性や因果関係が我々の身体をもって実感されることはない。コンピューター内で金融活動・商業活動を行う中で我々の身体的感覚がとらえることのできるの、せいぜいモニターに映る数字やグラフを見たときの視覚的な情報と、キーボードをたたくときの指先の触覚だけなのかもしれない。

では、身体的実感が希薄であるにもかかわらず、金融活動や商業活動だけでなく、政治活動はもちろん教育活動においてまでも人がグローバリゼーションといううねりの中に入っていかうとするのはなぜなのか。そこには、均一化の中で平等が実現するのだというパースペクティブな予測を提供する声が響いているからだ。グローバリゼーションは、均一の為替システムを世界中に行き渡らせることを目指す運動であるとスピヴァクは言った。そして、その目的は「世界中に同じ交換システムを作り出して資本の移動を容易に

すること」(『日本』15)であると彼女は解説する。資本主義の自由競争の中で同じ一つのシステムの中で競争するためには資本の流動性は大きい方がよいに違いない。人々はそう考える。そればかりではない、資本が移動しやすいことは公平な状況でもあるのだと。それ故に、グローバリゼーションのうねりは政治活動の原動力となり、教育活動の指針にも組み入れられている。そこには、グローバリゼーションがよきものを目指す運動なのだという幻想が持ち込まれているからである。

しかし、「抽象的な思想家と見なされながら、その実、実際に生きられた具体的な生の磁場を示さずに、文学や文化、哲学を講じたことはなかった」(新田)スピヴァクであるからこそ見えたものがある。スピヴァクの目線は21世紀世界を牽引するグローバリストたちとは別の領域へと向けられているのである。彼女が目をもけるのはグローバリゼーションを推進する側ではなく、そこからとりのこされた世界である。二つの世界には全く異なる時間が流れ、二つの世界の未来への展望には重なりあうものは何一つとして見られない。スピヴァクは世界の諸地域を歩いて自ら観察した結果や、自分の生まれ育った西ベンガルの状況を見据えて次のように言う。「歴史的、政治的、倫理的な諸理由によって世界は不均等に発達してきた」(『日本』15)と。そうした地域では「知的労働への権利」(『声』37)は許されてこなかったし、民主主義という言葉も社会の上層にいる人にとって、社会の下層にいる人にとってでは意味は異なっており、「平等とは同じことではない」(『声』42、43)と。

資本主義による経済活動とは、地域差・階層差・情報へのアクセスの差などあらゆる差異を、投資や開発という名の行為によって操作することで行われている。商業や金融の営みとは、「富めるものと貧しいものとの違いによって金融資本を肥え太らせていく」(『声』44)ものであるからだ。グローバリゼーションを推進する側の議論の中核にあるのは、現実の状況を透明に見えなくする楽観的認識と、未来に開かれた時間がもたらす希望的予測である。そのからくりを無視し、それに気付かぬふりをするグローバリストたちは、グローバリゼーションを推進するために、「“来るべき” (to come) というレトリック」(26)をもって人々を未来という時間へ駆り立てる。しかし、そこで振り出されるのは「ゆくゆくは均一になるという偽りの約束」(『日本』15)という空手形である。グローバリゼーションに参加することを決めた側はその手形を受け取った。彼らは／我々は一旦受け取ったからには、それが

空手形である可能性には目をつぶるか、もしくは空手形であることが判明しないように時間を引き延ばすべくさらなるグローバリゼーションの運動を煽り立てていくのである。

「序文」の冒頭で、スピヴァクが「グローバリゼーションは資本とデータでのみ起こる」と言ったことはすでに述べた。それに続けて彼女は「情報の支配／情報の駆使能力 (information command) が、知ることと読むこと (knowing and reading) の能力を破壊してきた」(1) と言っている。21世紀世界における情報は、我々の知的活動にどのように作用しているのか。それについてスピヴァクが指摘するのは、我々が思考するときの速度である。電脳空間と化した地球をめぐる情報は「シリコンチップの速度で作動」(『声』92) するが、生身の思考は、身体的実感を伴って行われるため、瞬時に作動するのでなく時間差を必要とする。コンピューターによる情報処理と我々の思考の間には、速度において決定的な差があるということをまず確認したい。次に量である。「利用可能な情報の量が…増大すればするほど、他者に共感し、私たちのために他の可能性を想像する能力はますます減退していく」(『声』84)。ここでも、コンピューターのメモリーに蓄積される情報と、経験をとおして形成される人間の記憶が含有できる情報の量とでは比較するべくもないことが指摘されている。そもそも、人間の記憶とは選択的なものであり、情報を忘れることにより自分なりの脈絡を作りそれが記憶として登録されているわけなので、前者(コンピューターのデジタル記憶)の量の増大と後者(人間の記憶)による思考の力は反比例の関係であるとさえ言えるのだ。

偽りの約束をかかげつつ、瞬時の情報処理によって地球上にある差異にくまなくアクセスすることで資本の移動を活性化して利益を集積していく。これが21世紀の経済活動である。シリコンチップの速度で作動するこうしたグローバリゼーションの空間の中において、それを稼働させる側に立つという未来形の願望に身を任せることも一つの希望ではあろう。しかし、グローバリゼーションに対して我々がとるべき態度は、それを超えるのではなく、そこに何かを補完することだとスピヴァクは言う。「グローバリゼーションにおいて欠如しているものの正確な姿を知っておかねばなりません。」(『声』82) そのために我々がすべきは、自分が囲まれている透明な現実の正体を見据え、自分がひたっている未来へ誘惑する時間を今一度点検することであろう。人文学こそが、今、そうした困難な知的労働を行える最後の領域であるという



スピヴァクという言葉には深く同意したいと思う。

### 3. 遅い速度で教えるという冒険

グローバリゼーションと教育という問題に入っていこう。グローバリゼーションは政治、経済の領域に起こっている現象であるから文化・教育の領域には影響を及ぼさない。こう考えることが出来ればよいのであるが、21世紀社会における知の活動への評価を見る限り、我々の知的能力の運用法は、グローバリゼーションがもたらす時間感覚と経済概念によって原型をみわかれぬほどに浸食されて崩壊していると言わねばなるまい。その結果、本来は知の運用法を伝え、知の限界をさぐり、そして本当の知を実演する喜びを教えるはずの教育現場は、グローバリゼーションが要請する時間感覚とそこから来る因果関係への強迫観念だけが支配する現場となってしまっている。

グローバリゼーションの時間感覚とは、速度だけを価値の指標とする時間把握である。グローバリゼーションが「資本とデータの中で起こっている」とスピヴァクは言うが、資本もデータも情報の伝達をその基本活動としている。つまり、そこでは情報の伝達速度、つまり活動する人間から言えば情報の摂取速度こそが、グローバリゼーションの空間においては何よりの指標となる。だがしかし、ここで、情報を数えるときに英語では a piece of という言いまわしで扱うことを思い出してみたい。情報を受け取った者は、それを一つの現実として扱うわけであるが、実はそれは「一つの断片 (a piece of)」にすぎない。そのむこうには、その断片を含み、その断片の意味を変質・逆転させることになるかもしれないより大きな情報が、その時点では可視化されない形で存在している。グローバリゼーションの世界では、問い合わせにたいして瞬時にもたらされる情報、あるいは、同時中継的に発信される出来事についての情報が求められている。時間の経過の中で徐々に立ち現われてくる現実についての情報は、我々が捕獲する前にどこかへ流れ去っている。

グローバリゼーションが要請するものとして、時間感覚と並べて挙げた因果関係への強迫観念は、以上の事情から導き出された状況である。自らのなした行為—商品・サービスの購入という経済行為であれ、行政的政策であれ、学業の結果であれ—を、その結果や評価と結びつけるのに、その伝達速度は速ければ速いほどよい、できれば瞬時に結果が届いてほしい。自分の行為とその結果の因果関係を無時間の中で把握したいという人間の欲望、人間の弱



さにグローバリゼーションはつけこんでくる。現在の世界の中では、テクノロジーの開発と資本主義の巨大化が手に手をとって我々のこうした強迫観念を刺激しようとせまってくる。一時の安心感や刹那的な快感を追い求める状況に我々が中毒していることに気付くことは難しいのかもしれない。

こうした例にもれず、教育現場にもグローバリゼーションの麻薬は染み込んでいる。資本とデータが跳梁跋扈する新たなる領域と化したグローバル社会の現状を、スピヴァクは次のように表現する。「今日の新しい教育を受ける者たちはたいていが、速さと雇用と市場の成功の仕方を至上の価値と見なすように教え込まれてしまっている。」(『声』60) 西ベンガルの農村において、教育する側とされる側の両方が、いかに知的労働への権利を奪われているかを観察し報告するスピヴァクは、一方で、最高の高等教育を受けているはずのアメリカの大学(彼女はコロンビア大学で教えている)の学生たちも、別の意味で知的労働の権利を奪われていると考えている。「なぜなら彼ら彼女らはインターネットによる検索エンジンの機能にたよりに、卒業後の雇用と収入にしか焦点をおかない学習態度にどっぷりとつかっているからです。」(『声』37) インターネットでの情報収集とは、クリック一つで瞬時に得られるという意味でグローバリゼーション時代の基本操作であろう。そして、大学で教育を受けることの意味を、卒業後の雇用と収入のためだけにあるとする態度とは、大学教育を受けた自分にたいする資本主義社会からの評価が、ジョブマーケットに出るその時点でいち早く下されることを当然とする態度である。

こうした学習態度をもたらすグローバリゼーションの時間感覚は、学生の側の行動・心理だけに見られるものではない。それは、研究機関としての機能を持つ大学という場そのものへおよび、とくに人文系学問への軽視・抑圧として働いている。そこでスピヴァクが持ち出すのは *sustainability* という概念である。「持続可能性」という意味で使われるこの言葉は、今日、環境問題やエネルギー問題について語る際に用いられているが、スピヴァクはそれを人文学というコンテキストの中に入れてその概念を次のように解説する。

The humanities version of sustainability, in the early days, was to maximize the *mind-numbing uniformization* of globalization. (2 italics mine)

この言葉を理解するために、グローバリズム社会において行われている sustainability の形 (the practice of sustainability) についてスピヴァックが言っていることを聞いてみよう。スピヴァックはこちらの種類の sustainability を “doing the minimum of something in order to do the maximum of something else” (2) と言って、人文学の sustainability と区別している。自分のなすことの量を最小限にして、その結果（金銭であろうと評価であろうと）を最大限に獲得すること。これがグローバリズムにおける「持続可能性のための実践」である。結果についての情報が瞬時に手に入り、自分が行っていることとその結果との因果関係を細大漏らさず獲得出来るこのグローバリズム版 sustainability に我々は今、浸っているのである。

しかし、ここで一つの警告が聞こえてくる。グローバリゼーションの画一化の中で生身の人間にとって決定的に欠如しているものがあるのではないかという声である。瞬時に下される因果関係は、我々の身体が時間をかけて納得する物事の成り行きと結果の因果関係と同じであるはずがない。いち早くもたらされる情報は、恣意的に切り取られた後の残りの情報の全貌を伝えてはいない。外界からの情報を五感で受理し、記憶と情念によってそれを自分なりの意味に変換し記憶に登録する人間にとっては、ゆっくりという速度でしか理解できぬことがある。そのような事情を隠ぺい・抑圧した中でグローバリゼーションの空間では「(グローバリゼーションの中で生きていくための) 持続可能性」が唱えられている。スピヴァックはそのことを mind-numbing uniformization (心を麻痺させる均一化) と呼んだのであろう。

先の引用をあらためて解説しておこう。スピヴァックによれば、人文学における sustainability とは、「心を麻痺させるグローバリゼーションの均一化を最小限にするために、想像力のトレーニングを最大限に行うこと」なのである。これは、グローバリゼーションで推奨・実践されている「持続可能性」に対処するための全く逆の方策としての「持続可能性」である。21世紀の今、これは大変難しいことに思われる。しかし、人文学が置かれた苦境の中において、スピヴァックの次の言葉は一つの希望をもたらししてくれる。「グローバリゼーションは経験する存在である我々の感覚器官 (the sensory equipment of the experiencing being) には決して起こらない。」(2) であるとすれば、感覚器官からもたらされる外界の情報を一つ一つ身体を通して受容し、その意味を認定しながら物事を理解すれば、我々はグローバリゼーションの暴力の侵

入をせき止めることができるであろう。「人文学のゆっくりとした教育ペースによって」(『日本』20)、「人文学の遅い速度で訓練された頭脳と心」(『声』38)を育みグローバル化の時間の流れに逆行する術を教えること。人文学を仕事とする人間としては、「美学教育のみがそのことへの対応をし続けることができる」(2)という提案に本気で取り組む義務を新たに確認するのである。

#### 4. 欲望の在りかを変えること

教育と倫理とはいかなる関係にあるべきなのか。人文学の教育と、それ以外の領域の教育とではどこが違うのか。そしてグローバル化の波により隅の方へ追いやられ、効率という成果を最速で提示させられるという「速度の遅い人文学」にとって勝算の少ない競争に参加させられている状況の中で、我々、人文学者はどのようなことを教えるべきなのだろうか。

教育とは、欲望を飼いならし、欲望を社会性の中で処理する方法を教え、欲望の抑圧を推奨するものであるという考え方がある。しかし、スピヴァクはそうした言葉は使わない。

私が理解しなくてはならないのは彼ら彼女らの欲望です(必要ではなく)。そして理解と愛をもってその欲望のあり方を変えていくことができるよう努めなくてはなりません。それこそが人間に関わる学問、すなわち人文学の教育というものではないでしょうか。(『声』40 強調下河辺)

生きていくための原動力である欲望を、抑圧するのではなく、「そのあり方を変えていく」よう努めなくてはならないとスピヴァクは言う。欲望の問題は他者との関係の問題でもある。そして、他者についての洞察を最も切実に追い求める場こそが人文学という領域であり、自分と他者との位置関係を最もリアルな形で意識させるが、そこで行われる読みという行為である。

ではそこで何を読むというのか?我々は「具体的に呈示されているもろもろの文化の行為遂行的な様態に接近する手がかりを与えてくれる」(Discipline 13) <物語(narrative)>としてのテクストを読むのである。読者はそうしたテクストの外側にいるのだが、外側にいるからこそ出来ることがある。それは、「想像力をもった読者という立場として、他者化すること/他者とし

て接すること（othering）を自己目的として努力する用意のある、想像力をもった読者の立場にみずからを置く」（同13）ことである。テキストにたいする自己の立ち位置を確認した我々がすべきことをスピヴァクは以下のように言う。

This is preparation for a patient and provisional and forever deferred arrival into *the performative of the other*, in order not to transcode but to draw a response. (*Discipline 13 italics mine*)

我々は、「他者の行為遂行的な場」（同13）へ自ら赴くこと（arrival）に対して心の準備をすべきである。実行したスピヴァクの実感から言えば、それは「忍耐のいる、暫定的な、そして常に遅すぎる」到着であるが、その行為の目的を聞くと、そこには、他者と自分の位置関係について一般に言われていることに対する根源的な批判が込められていることに気付かされる。

スピヴァクは言う。「他者からの応答を引き出すために」我々はその場に到着するのであって、「他者からの応答をコード変換するために到着するのではない」。ここでは他者の場へ赴く目的が二つ並列されているわけであるが、スピヴァクはこの二つの目的の間には「途方もない差異（a world of difference）がある」（Discipline 13）と我々に警告を発している。どこがそれほど違うと言うのであろうか？まず後者の場合を考えてみたい。他者からもたらされる応答を自分にたいするメッセージとしてうけとるとき、我々はそれを解釈しようとするが、その際、自分の持つコード変換装置を稼働してその意味を受け取るであろう。そのとき我々はどこに立っているのか？他者の応答を受け取るくらい近くに到着しながら、我々は他者の上に立ち、自分の側の変換装置を手放すことなく他者というテキストを自分の言語に翻訳しているのである。<sup>6</sup>これに対して、前者の場合は、他者からの応答を引き出す。ただ、そのために、我々は他者の行為遂行的現場に到着する。他者からの応答の意味を確定するためではなく、その応答を引き出し続けることが目的である。もしその応答からのメッセージを言語に翻訳しなければならない場合は、我々は他者との共同作業の中でそれを行うであろう。

ここに提示されたのは、読者の位置についての新しい提案である。人は世界を解釈するのに自らが所持する変換コードをもって自分の言語にとりこん

でいこうとするが、スピヴァクはこの癖を unlearn することを我々に要請するのである。その方法は彼女の言葉のあちこちで述べられているが、その中でくり返し唱えられるのは「棚上げする (suspend)」という行為である。

文学と哲学が私たちに教えるのは、これまでになかった仕方で対象を構築し新たな知を築くことです。…文学について言えば、この訓練はテキストの読み手の利害や先入観を棚上げにすることを促します。そうすることでテキストは限りなく他者の真実へと近づいていくのです。(『声』58 強調下河辺)

これ以外にも、「読むというきわめて親密な行為として、他者の利益のもとに自分の利益を棚上げにする能力」(『声』62)、「読み、翻訳しているとき、私たちは自らをテキストないしは他者において棚上げすることを学び」(『声』92)、「想像力を働かせることで、テキストのなかで起きている言語にたいする私たち自身の利益や関心をいったん棚上げにする」(『声』130)といった箇所が見つかった。棚上げすべき目的語は、自分の利益や感心であるが、これを学校の道徳教科レベルに落として単なる自己の欲望の制御・抑圧と解釈してはならない。そうではなく、スピヴァクが提案する棚上げには深い倫理的要請が込められていて、それは、自らの立ち位置をずらすという冷静な戦略の中において実現されるのだ。<sup>7</sup>それは、グローバリゼーション<sup>8</sup>が推奨するデータ操作による即効性や効率性に対して、自分の身体感覚をかけて抗いつつ、そのしぐさの中で他者の応答を待ち受けるということであり、それが倫理的な身振りなのである。日本での講演の中で自らの生い立ちを語るスピヴァクが、自分にとっての人文学の意義に気付いたくんだりを語った部分がある。

人文学を真摯に研究することによって、人智を超えたものへの直観を得る訓練となること、そして、そのような研究はもし倫理への呼びかけがなされるようなことがあったときに、それに反射的に応答する準備ともなりうることを私は理解しました。(『声』26 - 27)

「グローバル化されうる」<sup>9</sup> この世界に対峙するための仕事が今、必要とされているとすれば、それは人文学の営みの中で行われるのである。それは、

倫理的であり続けることによって可能となるのである。

\*

『グローバリゼーションの時代における美的教育』「序文」において、自らの研究の道筋を振り返るスピヴァクは、その中に流れる一つの通奏低音として〈ダブル・バインド〉という概念を持ち出している。<sup>10</sup>「相矛盾した指示にさらされながら生きるすべを学ぶこと」という彼女の研究者としての在り方は、カント—シラー—マルクス—ド・マンという軌跡をたどったスピヴァクは述べている。この四つの固有名詞が彼女にとっての転換期を示しているというわけであるが、最終的に行き着いたド・マンという存在が21世紀の今、我々にとって一つの啓示をもたらすように思えてくる。

1970年代80年代に隆盛をほこった脱構築は、1980年代後半にはすでに“すたれて”おり、ド・マンのナチ協力スキャンダルが最終的な打撃となり、21世紀の今、誰も脱構築など言及する人はいない。以上が一つの考えである。しかし、ポストコロニアリズムの旗手として、脱構築的テキスト解釈とは別の世界で仕事をしているかのように見えるスピヴァクが、自身の仕事の根っこにド・マンの存在があることを自ら告白したことは大いに注目されてよいであろう。「序文」の最後に至り、彼女は次のように言っている。

It is the story of the parabasis that was for me the most sustained lesson of Paul de Man: displacing the lesson of Paul de Man to another theater. (34)

本来演劇の用語であった「パラバシス」（舞台の外にいて本筋とは無関係なコメントをすること）を、ド・マンは *Allegory of Reading* の最後のパラグラフで用いている。パラバシスとは、「テキストにおける二つのシステムの交差の比喩的連鎖の断絶」（Allegory 300）であり、異なった修辞コードが現れる場所では、修辭的に予想されていたものかわりに全く別の意味体系が出現すると説明されている。ド・マンがつけた注釈によれば、パラバシスとは「脱線、傍白、作者の介入、役を踏み外すこと」（Allegory 300）であるという。テキストの中でこうした状況を作り出すことを生涯かけて演じたド・マンの姿を見たスピヴァクが、その身振りを「自らをテキストないしは他者において棚上げする」行為として引き受けたと考えることができるのである。ド・マンとスピヴァクをむすぶ密かなつながりについては、稿をあらためて

書く予定であるので、ここでは、「ド・マンの指導により最初に Ph.D を取得した教え子」(33)として、スピヴァクが「パラバシス」の教えを「名誉を汚された私の恩師ポール・ド・マンから遺された最後にして最高の贈り物」(33)と言っていることのみを記しておきたい。

### おわりに一美しい島の住人であるために

グローバリゼーションの正体がどのようなものであるのかについてこれまで述べてきた。最後に、人文学の砦でもある言語の問題とグローバリゼーションの関係について一つのメタファーを使って考えておきたい。これまでは、グローバリゼーションの特質を、人文学の洞察によって阻止すべきもの、回避すべき状況、少なくともそれのもたらす毒素に対処すべき問題、として語ってきた。しかし、言語とグローバリゼーションについてこれから述べるメタファーの中には、グローバリゼーションの限界と危険性を見据えつつも、21世紀の地球上で共存していかななくてはならないさまざまな共同体の人間へむけた前向きのメッセージが込められている。

『グローバリゼーションの時代における美的教育』に収められた25編の論文の中で、最後におかれた二つの論文は「カタログ・エッセイ」である。スピヴァクはその二つの論文の中で「ダブル・バインドをはっきり見据えて説明する」試みをしていると述べている。第24番目の論文は「記号と痕跡」というタイトルがつけられており、2008年にニューヨークのグッゲンハイム美術館で展示された彫刻家アニッシュ・ Kapoor (Anish Kapoor) の「メモリー」についての解説文である。錆び色をした外観の巨大な繭のような現代彫刻を、スピヴァクは「製作のアレゴリーにおいて、グローバリゼーションのもつ普遍化の欲望に対する批判 (critique) になっている」(485)と述べている。そこで持ち出されるのは記号と痕跡の問題である。スピヴァクは言う。「記号は意味を約束する。痕跡は何も約束をしない。痕跡とは以前そこに何かがあったことを示唆するように見える何かにすぎないからだ。」(492)

ここで、スピヴァクの議論は形象としてのオブジェから、記号としての言語に移っていく。 Kapoor が痕跡を表象しようとしていることを理解したとき、スピヴァクはそれが記号システムでないことを同時に理解する。そして言うのである。「グローバリゼーションとは、痕跡のフィールドの中に浮か



ぶ言語化が行われる島 (an island of languaging) なのである。」(492) この文章は、しかし、もう少し説明が要るであろう。つまりこのままのレトリックでは、グローバリゼーションについての定義として読まれてしまいかねないからだ。スピヴァクはすぐ後でこのフレーズをもう一度持ち出しているが、そこではもう少し詳しいパラフレーズが加えられているので見てみよう。「グローバリゼーションは我々に言語という島 (an island of language) に生きることを要請するが、その島は痕跡という海に浮かんでいて、その岸边は常に変化していてどこからが海なのかがはっきりとしない。」(493) グローバリゼーションが島なのではなく、グローバリゼーションの中で生きる我々が、島として島の中で生きているのである。つまり、「グローバリゼーションの中にいる人間主体は言語行為を行う島 (an island of languaging)」(493) なのだ。

グローバリゼーションの波にもまれる我々人間は、痕跡という大海で溺れそうになりながらも、一人ひとりが「言語行為を行うための島 (an island of languaging)」(同) となる。人はその第一言語 (母語) を「モニターと」しながら別の複数の言語を「それぞれ不均等に (unevenly)」用いながら世界を解釈する。しかし、「果てしなく続く痕跡の海原では『理解する』ことが何の保証にもつながってはいかない」(同) である。

痕跡だけが広がる海に囲まれて、一人孤島に取り残されている自分。世界を切り取る際に、はじめて手にした母国語を介し、その後習得した使い勝手の異なるいくつかの言語を用い、我々は自らの認識の空間をつくりあげようと「言語行為を行う島」に住む。島のメタファーで語られるこうした状況からは、一見すると、悲観的側面しか見えてこないように思われる。しかし、スピヴァクは言うのである。「グローバリゼーションが“我々”を島に住まわせる」というのなら、その“我々”を地球上すべての人間に広げてしまえばよいと。そうすれば、「他の共同体で使われているノイズとしてしか聞こえないものにも意味が充満していること」(493) を想像することができるであろうと。

自分が島に立っていること。共同体や国家という名のもとに生きていても、その共同体や国家もまた島にしかすぎぬこと。ともすれば大陸の住民であると思いなし、島の住民を－例えば植民地として、例えば後進国として－支配しようとする欲望がポストコロニアル後のグローバリゼーション的欲望とし

て今、發揮されようとしている。そんな状況にたいし、日本で講演したスピヴァクは、「オセアニアにある多くの島のひとつである」(『声』132) 日本列島という島に住む我々日本人に語りかけたのだった。自分もまた島の間人なのである。「私たちはみな島の間人です。私はユーラシアという島からやってきました。そしてジャック・D・フォーブスが大カリブ諸島と呼んだアメリカ島に私は五十年間住んでいます。」(同)

グローバリゼーションがアメリカナイゼーションと同期してしまった今の状況にたいする異化作用として、スピヴァクは、アメリカを島と読み替えることでアメリカ大陸の中心性を脱構築し、その上で、異種混交性の空間としての島の意義を説いていく。島の意識をはぐくむことで「地球が単一の経験によってはいまだに計り知れない海に浮かんだ島々の集まりである」(『声』133) という認識が我々に訪れる。そのとき、「世界という海に浮かんでいるグローバリゼーションの偽りの約束をもたらす陸に閉じられた競技場が、なぜこれほどまでに不平等な場所であるかを悟る」(『声』134) ことが出来るのだ。この洞察に近づく最も確実な方法は人文学の研究・教育であるという思いを持って人文学研究者は仕事に取り組んでいくのである。

- 
- 1 スピヴァクは 2012 年公益財団法人稲盛財団が運営する京都賞第二十八回受賞者となった。京都賞とは、「科学や文明の発展、また人類の精神的深化・高揚に著しく貢献した方々の功績を讃える国際賞」である。毎年、先端技術部門、基礎科学部門、思想・芸術部門の各部門に 1 賞づつが与えられるが、スピヴァクは思想・芸術部門の「思想・倫理」というカテゴリーで受賞している。文学研究者から、人文学研究者へ、そして思想・倫理を牽引する発言者へと、スピヴァクの存在が次第に大きくなった結果、彼女の 21 世紀世界への発言がこうした形で認められたことになろう。
  - 2 The introduction opens with the double bind: learning to live with contradictory instructions. It traces a Kant-Schiller-Marx-de Man trajectory, where the European proper names are metonyms for epochal changes. (Spivak 3)

スピヴァクが、カント、シラー、マルクス、ド・マン、そしてペイトソン等と自分の議論の関係について論じているが、こうした点については、

上村忠男「シラーをサボタージュする」(上、下) (月刊『みすず』2014年5月号、6月号) に展開された詳しい解題を参照のこと。上村は、カントの「超越論的演繹」と「経験的演繹」の間のギャップをスピヴァクが使っていることや、シラーの「感性的衝動」「形式衝動」「遊戯衝動」をスピヴァクが自分の理論に導入していること、そして、さらにポール・ド・マンの講演録「カントとシラー」をスピヴァクがどのように読んだのか、などについて詳細な解説をほどこしている。

- 3 *Aesthetic Education in the Era of Globalization* (Harvard University Press, 2012) よりの引用は括弧内に数字のみにて示す。以下スピヴァクの著書の引用は *Death of a Discipline* (2003 Columbia U.P.) は (*Discipline* 数字)、“Can the Subaltern Speak?” は (*Subaltern* 数字) で示してある。一方、日本での講演録である以下の2冊については、英語版が出版されていないため、日本語版の頁を以下のように記してある。『いくつもの声』(人文書院2014) は (『声』数字)、『スピヴァク、日本で語る』(みすず書房 2009) は (『日本』数字) と示してある。
- 4 happily: in a satisfied or contended way
- 5 例えば、*Aesthetic Education in the Era of Globalization* に収録された第一論文“The Burden of English”はインドの高等教育機関で初めてスピヴァクが講演をしたときの原稿であり、第二論文“Who Claims Alterity?”はスピヴァクの故郷であるカルカッタで一番古い新聞 *The Statesman* に寄稿したものである。第三論文“How to Read a ‘Culturally Different’ Book”はインドの multicultural class-room で使うテキストにと依頼されて書いた“Hindu mythology”を背景としてものである。
- 6 翻訳という概念についてスピヴァクはしばしばメタファーとして用いている。「翻訳という問い」(『いくつもの声』収録、2012年11月12日 国立京都国際会館)を参照のこと。
- 7 スピヴァクは、「人間が生まれつき倫理的な存在」であると以前は考えており、「最初の言語を学ぶと倫理的な記号体系を発達させる」と考えていたと言う。今は、それに加えて、「倫理への衝動が可能となるためには、あらゆる動物の生を動かしている自己生存本能から距離を置くことが肝要だと」考えている。(『声』129)
- 8 画一化の意味をスピヴァクは以下のように言う。「少数の言語がグローバ

- リゼーションのビジネスを管理し、すべてをデータの形式へと還元することです。あらゆるものの統計化です。」(『声』92)
- 9 『グローバリゼーションの時代における美的教育』のタイトルについて、スピヴァクは別のタイトルを提案していたことをもらしている。それは「グローバル化されうる (globalizability) 時代における美的教育」というものである。「グローバリゼーション」はすでにこの運動が展開しその結果も地球上に到来しているという意味になるが、「グローバル化されうる」という語を用いるとき、それは、未来形の時間が導入され、我々地球人の手にその運動を制御する可能性がもたらされる。
- 10 『グローバリゼーションの時代における美的教育』の中でスピヴァクはダブル・バインドを自分のこれまでの仕事のすべてに通底する概念だと言っている。しかし、あらゆる議論をそこにもっていくやり方についてはあまりにこの概念を濫用しているのではないかという感想もときとして持たざるを得ない。とはいえ、上村は前記の論考においてペイトソンの概念を踏まえた上で、ダブル・バインドが「人間がその生涯に経験する有為転変のなかで直面させられるさまざまなディレンマにも (ダブル・バインドの概念が) 一般的に適用されうるのではないか」(上村 13) と解説しており、スピヴァクの立場を説明しており、我々を納得させてくれる。

## 引用文献

- Spivak, Gayatri Chakravorty. *Death of a Discipline*. New York: Columbia University Press, 2003. Print. 『ある学問の死：惑星思考の比較文学へ』上村忠男・鈴木聡訳、みすず書房、二〇〇四年
- “Can the Subaltern Speak?” (1988), revised edition. *Can the Subaltern Speak? : Reflections on the History of an Idea*, ed. Rosalind Morris. New York: Columbia University Press, 2010. Print. 『サブアルタンは語る事が出来るか』上村忠男訳、みすず書房、一九九八年
- *An Aesthetic Education in the Era of Globalization*. Cambridge, Mass: Harvard University Press, 2012. Print.
- Paul de Man. *Allegories of Reading : Figural Language in Rousseau, Nietzsche, Rilke, and Proust*. Yale University Press, 1979. 『読むことのアレゴリー—ルソー、ニーチェ、リルケ、プルーストにおける比喩的言語』

下河辺美知子 グローバリゼーションの中の人文学 魅惑する時間と偽りの約束

土田知則訳、岩波書店、二〇一二年

スピヴァク、G. C. 『スピヴァク、日本で語る』 鶴飼哲（監修）、本橋哲也・

新田啓子・竹村和子・中井亜佐子（訳）、みすず書房、二〇〇九年

—— 『いくつもの声』 星野俊也（編）、本橋哲也・篠原雅武（訳）、人文書院、  
二〇一四年

上村忠男「シラーをサボタージュする」上、下 『みすず』二〇一四年五月  
号6～20頁、二〇一四年六月号

下河辺美知子 「21世紀における惑星的想像力：globeの濫喩についての一考  
察」『成蹊大学紀要』第49号二〇一四年三月 173頁～187頁

新田啓子「スピヴァク いくつもの声」週刊『読書人』二〇一四年